

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS ～お荷物と呼ばれた男～

橘 葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers ～お荷物と呼ばれた男～

### 【Nコード】

N0414P

### 【作者名】

橘 葵

### 【あらすじ】

管理局内で「お荷物」と呼ばれる青年。そんな彼には秘密が…。魔法少女リリカルなのはStrikersの二次小説です。こういうのが苦手な方は読まないことをお勧めします。主人公はデバイスなし。チート能力だけを駆使して戦います。

## prologue 1 (前書き)

行き当たりばったり最高!!

そんな小説です。

## prologue 1

「はっ？もう一回言ってくれないッスかね？」

一人の青年が、自分の目の前に座っている三人の老人を見ながら聞く。

その青年は髪は短髪ではあるがぼさぼさで、とても清潔感があるとは言えない。

顔も何処となく疲れたような顔をしており、胡散臭さが漂う顔つきをしていてお世辞にもカッコイイとは言えない。

良くて中の下あたりである。

その青年は目を丸くしながら老人たちを見つめ答えを待つ。

その目は「嘘だと言ってくれ」と訴えている。

「ちゃんと聞いてなかったのかの？」

だからお前には機動六課に行ってもらったのじゃ。」

「とうとうボケやがったスか？」

「失礼な…ボケちゃおらんわい。」

ちなみにこれは決定事項。

ついでに言えばいつものようなお願いではなく、命令じゃ。」

青年にぼけ老人扱いされた、真中に座っている右頬に傷のある立派な白髭を蓄えた老人、

ラルゴ・キール武装隊名誉元帥が言う。

「何で俺がそんなエリートが集まりみたいなどに行かなくちゃいけないんスか!？」

絶対いやッス!!

だいたい俺が周りからなんて言われてるか知ってるでしょうが!!」

「知つとるがもう決定したことじゃ。諦めて逝ってくれ。」

「逝くの文字が違っッス。」

青年に死刑宣告したのはレオーネ・フィルス法務顧問相談役。

「まあまあそう言わないで。

だいたいその言い訳を私たちにするのは間違っているのじゃないかしら？

私たちに言われて力を隠しているのですから。

あなたの力は私たちが一番知っているわ。」

やんわりと青年を諭す人の良さそうな老婦人。

ミゼット・クローベル統幕議長である。

どうやらこのさえない青年は伝説の三提督直々の任務を受けているらしい。

しかし青年はかなり嫌がっている。

「確かにそうツスけど…。

というか、なら他の人にすればいいじゃないツスカ。

表で「お荷物」だの「落ちこぼれ」だのその他諸々言われている俺より、良いのいっぱいいるでしょうが。」

「どうも管理局の上層部が怪しいのよ。」

あんまり疑いたくはないのだけれど、やはり私たちが信頼できる人の方が安心できるでしょう?」

「そうッスけど…。」

そうッスけど…。

ううゝ分かったッスよ。

行けばいいんですよ。

行けば。」

「あなたならそう言ってくれると思ったわ。」

ありがとうね。」

青年は何かしてこの任務を受けまいと必死であったが、三提督が折れないと悟ると諦めたように任務を引き受けた。

「んで？」

行った所で俺は何をするんッスか？

言っときますけど俺は隊の仕事しないッスよ？

ばれたら困るッスから。」

「そのことだが…。」

今まで隠すよう言ってきたが、これからは多少なら力を使っても構わん。」

「それは俺が表舞台に出ることになるんッスけど…。」

分かってるッスか？」

「無論じゃ。」

そのためにお前には今までオーバーSランクの任務ばかりやらせ、知名度を上げてきた。

今やお前の二つ名を知らん者はおらん。

すべてはお前を誰にも縛らせないため。」



「わしらの権力がいかに強かろうと限界がある。

そのためにお前自身に権力を着けさせる必要があった。

お前が利用されないように……。」

「そしてあなたは力を手に入れた。

もうあなたは利用出来るような子ではないわ。

だからそろそろあなたがあなたとして活動しやすいように表に出るべきなのよ。」

三提督は優しい目で青年を見ていた。

それは成長した我が子を見守る親のような目であった。

「わかったッス。

でも基本的には隠したままでいくッスよ。

敵が内にいるなら隠し玉は多いに越したことはないッスから。」

「その判断はあなたにまかせるわ。」

では早速だけど明日、機動六課の部隊長の所に挨拶に行つて来てね。  
明後日には六課に出向となるから。」

「了解つす。」

あと今俺が行つてるレジアス中将の調査つすけど、ロッサに回して下さいッス。

あいつが一番信用出来るッスから。」

「わかった。」

そのようにしておこう。

くれぐれもあの娘たちをよろしく頼むぞ。

三提督直属特別遊撃部隊LAST CARD《最後の切り札》唯一の隊員 刹那の処刑人 そして…我らが息子、一之瀬真（いちのせまこと）一等陸士よ。」

「恥ずかしいからその二つ名で呼ばないで欲しいッス。」

「気をつけるのだぞ。」

「体調崩さないようにね。」

「分かってるッスよ。じゃあ言うてくるッス。義父さん、義母さん。」

## prologue 1 (後書き)

次は真の目線で…。

今までの真。

## prologue 2 (前書き)

真の正体は…。

## prologue 2

### 真side

俺がこの世界に来てから早くも7年が過ぎたッス。

俺はもともとこの世界の住人ではないッス。

もっと言えばこの次元の人間ではないっすけどね。

俺がこの世界に来たのが19歳の時…。

前の世界ではしがない大学生だったッス。

まあ極度のゲーオタではあったんッスけど…。

アニメと漫画も少々…。

でもまあそれなりに満足な生活をしていたッス。

将来もそのまま大学で資格を取って、普通に企業に就職するか公務員になるつもりだったッス。

でもある日…

俺はくそ神様の気まぐれで…

この世界に来ることになったッス。

神さんはチート能力をくれてやるから、それを使って原作介入しろとか言い出した。

最初は「はっ？」とかなったんスけど、でもまあ魔法少女リリカルなのはStrikersの世界って聞いた時はテンション上がったッスね。

んで、神に願ったチートは俺が知る能力・魔法・魔術・道具の使用。簡単にいえば漫画やゲーム、アニメの魔法や魔術を使わせろってことッスね。

たとえばFateのアーチャーの【無限の剣製】とか【王の財宝】とか…。

でもさすがにそれはチート過ぎと言われ、3シリーズに限定されたッス

そこで俺は自分もつとも詳しいと思う、Fateシリーズ・テイルズシリーズ・ネギまの3シリーズを選んだんッス。

その後普通に転送されたんッスけど、転送された場所が有り得なかったッスね。

次元犯罪者のアジト。それもオーバーSランクの。

生きるために必死だったツス。

始めて人を殺したツス。

人を切った時のあの感触…。

人が焼ける匂い。

全てが気持ち悪くて、怖かったツス。

何度も何度も嘔吐したツス。

その世界は次元犯罪者の巣窟みたいな世界で、生き残るために殺さなければならぬ日が続いたツス。

だんだん殺すことを割り切れるようになった時、俺は戦闘術を身に付けていたツスね。

そのうちその世界では有名になって、挑んで来る者もいなくなり殺さなくてもいい日々が続いたツス。

そしてだいたい落ち着いて来た頃、殺した次元犯罪者のアジトで転送ポートを見つけたツス。

それはクラナガンに繋がっていたツス。

正直泣いて喜んだツスね。



やっとあの地獄から抜け出せたって…。

その後街を散策していたら、不良に絡まれてるおばーちゃんがいたんで、助けたッス。

正体を知ってびっくり。

ミゼット提督だったんスよね。

お礼がしたいからなんでも言えって言うから、素直に保護してくださいって言ったッス。

何だか良く分かってないようだったから、これまでの事を一部ぼかしながら話したッス。

当然自分の能力のことも話したッス。

そしたらミゼット提督はキール元帥とフィルス相談役に俺を紹介してくれて、三人で保護してくれる形になったッス。

最後の方には俺を養子にするとか言ってくれたんスけど、丁重にお断りしました。

何故かって？

だっていい年こいて、三人が「自分の養子にする！！」って大喧嘩するんスもん…。

とにかく保護してもらった俺はその恩を返すために管理局に入局したッス。

とりあえずは能力は隠せと三提督から言われていたから隠してたん  
スけど、リンカーコアがないのに、魔導師扱いの俺は他の魔導師か  
ら「落ちこぼれ」と呼ばれるようになったツス。

それ自体は良かったんツスけど、陰湿な嫌がらせがめんどくさかつ  
たツスね。

またこの頃から三提督の計画を手伝うために直属部隊を設立したツ  
スから、自分の悪評は隠れ蓑になって都合がよかったツスね。

基本的に隊の事は極秘事項だし…。

部隊の任務はおもに2つ。

1つ目は管理局内部の調査及び浄化。

簡単に言えば裏から手をまわして失脚させる。

2つ目はオーバースランクの次元犯罪者の捕獲及び抹殺

これはそのままツスね。

捕まえるのが優先されるけど、駄目だったら処理。

逮捕は難しいんスよ。

手加減しないといけないから、下手したらこっちがやられる。

まあそんなこんなで任務をこなしていくと、1つ問題が出てきたん

スよね。

まあ名前しか知られていない極秘の部隊だから行動は基本的に夜。  
しかも深夜帯に活動する。

そのせいか次の日は半端無く眠い…。

たいていは所属している隊の仕事は出来ないッス。

寝てしまつて…。

そのため俺は「お荷物」と呼ばれるようになったッス。

それは何処の隊でも同じ…。

そうなるとだんだん仕事をする気も無くなつてきて、今では普通にサボって自分から「お荷物」になつてゐるッス。

多分機動六課でもそう言われてゐるッスよね…。

まあばらしてもいいと言われてゐる分だけ、いつもより気持ちも楽ッスけど…。

まあ自分は「お荷物」を演じましょ…。

その方が仕事なくていいから楽だし…。

でもまあ、原作介入は楽しみだな…。

よし頑張るッス!!

## prologue 2 (後書き)

真の過去を書きました。

なかなかまとめがうまくいかねッス…。

次は真のステータスを書きます。

オリ主紹介（前書き）

激チート野郎

その名は一ノ瀬真

## オリ主紹介

プロフィール

名前 一ノ瀬 真（いちのせ まこと）

性別 男

年齢 26歳

身長／体重 170？／63？ 割とがっしりした感じ

性格 オタク。めんどくさがりで、サボり魔。自分に甘く、他人に厳しいというダメ人間を演じている。

やる時はやる男。冷めたように周りを見ているが、いろいろ気にかけている。

他人に厳しいのもほとんどは、自分の経験から来るアドバイス。

しかし普段の態度や行動から誤解を受けやすく、相手を怒らせてし

まう。

好きなこと／もの　温泉巡り・おいしいもの・家族―（今は三提督）  
・仲間

嫌いなこと／もの　仕事・管理局の腐った部分・自分や仲間の命を  
大切にしない奴

能力　F a t eシリーズ・ネギま・テイルズシリーズの能力・魔法・  
術・道具等の創造と使用

ちなみに全てノ　コスト

集中力や体力は使うが、その他の魔力の消費や反動は一切ない。

その代わりに真にはリンカーコアは無く、デバイスも使えない。

運動能力はもともと悪くはなかった上に、次元犯罪者と殺し合いを  
している最中にアーチャー等の剣技等

の能力を使っていたため、いつの間にかアーチャー達の剣技等を体



得した。

今では能力無しでも十分強く、勝てるものはほぼ居ない。

見た目等 顔は下の上から中の下

はつきり言ってカッコ良くない。なかなかの残念野郎。

身長も高くもなく低くもなく。ただ戦闘ばかりしていたので戦闘に特化した筋肉が付いてがっしりしている。

「ッス。」口調は殺し合いの世界の時に精神崩壊を犯さないように本能的に明るくなるうとして付いた。

本人も人を殺した戒めと思っており治す気が無い。

## オリ主紹介（後書き）

基本的にはオリジナルは主人公だけのつもりでいます…。

ヒロインは…。

どうしよう…。

## episode 1 出向…の前(前書き)

### 本編1話

とうとう真が原作キャラと接触するか？

どうなることやら…

作者にも分かりません(笑)

それでは魔法少女リリカルなのはStrikerSのお荷物と呼ばれた男…始まります

## episode 1 出向：の前

side はやて

「はあゝ。」

管理局本局遺失物管理部機動六課部隊長室。

その長であるウチ、八神はやて二等陸佐は自分の目の前のモニターを見てはため息をついていた。

「どうしたですか、はやてちゃん？すでに10回はため息ついてるですよ？」

ウチのユニゾンデバイスであるリインフォースツヴァイが心配そうに声をかけてくれた。

どうやらウチがモニターとにらめっこしてはため息をついてる様子に、我慢が出来なくなっただらしい。

「ああ、ありがとなリイン。大丈夫や。」

ウチは何でもないように振る舞ったんやけど、明らかに疲れが顔に出ていたらしい。

「ホントになにがあったんですか？ひどい顔してるですよ？

そんな顔のはやてちゃん見たことないですよ。」

「そんなひどい顔しとるか？ウチ？」

ウチはひどい顔と言われ、両手で頬を抑える。

「失礼します」「

そこに二人の女性が入ってきた。

「なにしてるの？はやてちゃん。」

そう聞いたのは亜麻色の髪をサイドポニーにした可愛い女性。

元本局武装隊航空戦技教導隊のエース・オブ・エースで、今は機動六課のスターズ分隊隊長、

高町なのは一等空尉。

「そうだよはやて。なんか変な顔になってるよ。」

と何気に毒を吐いた金髪の美女。

元管理局本局次元航行部隊所属の執務官で、今は機動六課ライトニング分隊隊長、

フェイト・T・ハラOWN執務官

「なんや二人してひどいなあ。ちょっとお顔のチェックしとっただけや。」

ウチは二人の言葉に傷ついたようにむくれる。

しかしいつものことなので、なのはちゃんもフェイトちゃんも軽く流してまう。

「にやはは、ごめんね。」

「それではやて。何の用事だったの？」

「そうやそうや。ちょっと二人に相談があるねん。聞いてくれるか？」

ウチは立ち上がりながら、二人にソファーに座るよう勧めた。

二人も顔を見合わせてから、ソファーに座ってくれた。

「それで？相談って何？」

「あんなこれを見てもらいたいんやけど…。」

そう言いながらウチはパネルを操作し、一人の男の詳細が書いてあるモニターを出した。

「この人は…？」

疑問に思ったフェイトちゃんがウチに問いかけてくる。

「明日からウチに来る新隊員や。今日挨拶に来るらしいわ。」

「えっ…。機動六課が始動したのは昨日だよ？」

「それにこの人って…。」

なのはちゃんは知ってるようやな…。

「なのは、知ってるの？」



「うん。噂だけは…。」

やっぱりな…。まあ本局やと有名人やからな、この人。

「なのはちゃんを知つとるようやけど、まあ一応確認のために聞いといてや。」

この人は一ノ瀬 真一等陸士。

年はウチらの7つ上で、26歳。

入局7年目やな。

その間にいろんな隊に行つとるんやけど…。

この人の問題はここからや。

この人どこの隊でも仕事せえへんかったから、「お荷物」って言われとるんよ。

ここまでなんかあるか？」

「そこまでは分かったけど、どうしてそんな人がウチの隊に？」

自分たちで言うつもりはないけど、ここって一応エリート部隊だよね？」

「そうやねん。相談したい事はそこやねん。」

そう言いウチはパネルを操作し、新たな資料を出す。

「ちょっとここ見てくれるか。所属部隊の履歴のところや。」

「これって…。」

「前の部隊がレジアス中将の…。」

「そうやねん。おそらくレジアス中将のスパイ。もしくは嫌がらせ。どっちにしても、どうにかせんといけん。」

なにかいい案あるか？」

「うん。」

二人とも悩みだす。

まあそうやるな。ウチもこの人の対処のため息ばかりやし…。

「ねえはやてちゃん。」

「なんやなのはちゃん。いい案浮かんだか？」

「多分会って話してもないのに、いい案なんて浮かばないよ。」

今日その人挨拶に来るんでしょ？

なら会って話してみたら対応考えようよ。」

「なるほど…。」

一理あるな。

百聞は一見に如かずって言うしなあ…。」

「はやて。」

私の考えんだけどフォワードメンバーとして入れるのはどうだろう。

それなら朝から訓練ばかりだし、近くに私たちもいるし、監視もできると思うんだ。」

「それはええ考えや。でもどっちの隊に入れようか…。」

「私が言っただから、ライティング隊の所属で良いよ。」

「ほなよろしくたのむわあ。」

話が終わるとほぼ同時に受付から通信が入る。

『八神部隊長。お客様がお見えになっていますがいかがなさいますか？』

「意外に早かったんやな。部隊長室に通してもらえるか？」

『わかりました。』

そう言って通信が切れた。

「なのはちゃんとフェイトちゃんと一緒にあってな。」

「うん。」

「もちろん。」

さて鬼が出るか蛇が出るか…。

どっちも出んで欲しいけどなあ…。

episode 1 出向…の前（後書き）

原作キャラと接触させようと思ったのですが、意外に長くなってしまいました…。

はやて自重しろ!!（笑）

次こそは接触させますので…。

次回もよろしくお願いします。

## episode 2 挨拶（前書き）

PV8900 越え

ユニーク1300 越え

ありがとうございます。

これを励みに頑張りたいと思います。

そして烈火の祝福様

コメントありがとうございます。

初のコメントで感激しました。

またコメントをいただけると、とてもありがたいです。

それではepisode 2 挨拶始まります。

## episode 2 挨拶

「ここが機動六課ツスカ…。

でかいツスね。」

目の前に広がる新築の建物。

俺は今機動六課の隊舎の前に来てるツス。

正直あまりの広さに迷子になりそうツス。

「とりあえず受付に行くツスカ。」

「すみませんツス。」

「はい、なんですよ。」



あつ、この人今俺の顔見て、渋い顔したッス。

なんだかへこむッス…。

「あの〜。」

おっと、いけない。

とりあえず要件をと…。

「明日から機動六課に出向となる一ノ瀬真一等陸士ッス。

今日は八神部隊長に挨拶に来たんスけど、取り次いで貰いたいッス。

」

「分かりました。

少々お待ち下さい。」

ふう、とりあえず待ちますか。

しかしこの隊おかしいんじゃないッスかね…。

どこ見ても美男美女しかいないってどういうことッスか!!

自分がブサ面だと自覚している俺には肩身が狭いッス…。

明日からこの隊か…。

鬱になりそうッス。

「はあ…。」

「お待たせしました…ってどうしました？  
なにかありましたか？」

「あつ、いやっ何でもないッス。

大丈夫ッス。」

「そうですか？

八神部隊長がお待ちですので、部隊長室までご案内します。

「こちらです。」

さてと行きますか。

sideはやて

ブー

どうやらきたみたいやな

「どうぞ。」

「失礼します。」

「一ノ瀬一等陸士をお連れしました。」

「おおきにな。

自分の仕事に戻ってくれてええよ。」

「分かりました。

それでは失礼します。」

さてどうしよか…。

side out

side 真

「お初にお目にかかるッス。

一ノ瀬真一等陸士ッス。

よろしく願いしますッス。」

「ようこそ機動六課へ。」

ウチが機動六課部隊長の八神はやてや。

そんでこっちにおるのが…。」

「高町なのはです。」

この隊では戦技教導と分隊の隊長をしています。」

「そんでこっちにおるのが…。」

「フェイト・テストロッサ・ハラウンです。」

高町教導官と同じくこの隊では分隊の隊長をしています。」

うわーめちゃくちゃ警戒されてるッス。

まあしょうがないンスけどね…。

俺の噂聞いてるだろうし…。

「あゝそんなに警戒しなくても何にもしないッスよ？

仕事も含めて…。」

「ほう…。」

部隊長の前で仕事しない宣言するとはええ度胸しとるなあ。

あと別に警戒しとるわけやあらへん。

もともとこういう顔や。」

「そんなの嘘ッス！！

絶対警戒してるッス！！」

「まあまあはやてちゃん。

まずは落ち着こう。

これからの事をちゃんと話さないと…。」

「そうだよはやて。

この後も仕事あるんだから。」

「そつやな…。」

とりあえずやることをやらんな。」

た、助かったッス…。

「さてとりあえず一ノ瀬一等陸士。」

明日から出向してもらつ訳やけど…。

ちゃんと仕事はしてもらつで…。」

「無理ッス。」

「即答つ!?。」

「ほほう。」

なら無理な理由をきつちり話してもらおうか…。」

こゝ怖いッス…。

というか…。

あれ？

もしかしてこの人たち俺がリンカーコア無いの知らない…？

「あ、あの俺の噂知らないッスか？」

「聞いとるで。」

仕事をしない「お荷物」魔導師って。」

「あゝ。」

それだけッスか？」

「そうやけど…。

他になんかあるんか？」

なるほど…。



納得ッス…。

「えっと、もっと正確に言えば仕事ができないんッス。

俺リンカーコア無いんで…。」

あの…。

無言はつらいッス。

「「「ええっ~~~~~~~~~!!」」」

あつ、やっと反応があったッス。

「でも自分魔導師やる!？」

おかしくないか？」

まあそれが普通の反応ツスよね。

リンカーコアが無いということは魔力がないってことツスし…。

魔力が無いとパネルとか出せないし、操作できないし…。

だから俺は「お荷物」と呼ばれてた訳ツスけど…。

とりあえず今は八神部隊長に自分がなぜ魔導師登録なのか説明しないと…。

「そうツスよ。」

リンカーコアは無いけどレアスキルがあるんで、一応魔導師登録してるツス。」

「そういうことかぁ。」

ということはデバイスも…。」

「持っていないツス。」

「はやてどうしよう…。」

やっぱりフォワード難しいんじゃない…。」

うん…？

今聞き捨てならない事が聞こえたッス…。

「えつと…。」

誰がフォワードッスか？」

「あんたや。」

一ノ瀬一等陸士にはフォワードメンバーとして、ライティング隊に所属してもらうで。」

「無…。」

「拒否権はないからな…。」

「ですよねぇ。」

「いやはやてちゃん。

さすがに私も無理だと思うよ。」

「大丈夫や。

リンカーコアが無いのに魔導師登録されと言つことはや…。

おそらく一ノ瀬一等陸士が持つレアスキルは相当強力なもんや。

やないと普通はそんなことは許されへん…。

そうやる。

一ノ瀬一等陸士?」

うわあ…。

さらにめんどくさいことになったツス…。

しょうがないツスね。

1個だけ見せてそれをレアスキルとしよう…。

どれがいいかな…？

ある程度強力な奴じゃないとばれるッスよね…。

うん…。

よしあれにしよう。

この世界だと強力なはず…。

「確かに八神部隊長の言うとおりッス。

ただ戦闘には使えないッスよ？

対人ならまあ最強でしょうけど、対物だとほぼ意味無いッス。」

「最強言うたな…。

それはウチらにも勝てるっちゅうことか？」

「まあ勝てるっすね…。

その証拠に…」

俺はネギまのエヴァンジェリンやコタローが使う影のゲートを使って隊長達の前から消えて…。

「「「なっ！！消えた！？」「」」

「どうツスか？」

八神部隊長の影から背後を取ったツス。

「「「えっ…。」」「」」

「いつの間に…。」

「全然分からなかった…。」

「というか身体が沈んだよね…。」

「これが俺のレアスキル【ゲート】ッス。

まあ簡単に言えば瞬間移動ッスね。」

まあ他にもあるんすけどね…。

「そら魔導師扱いにもなるわ…。

こんな反則や。」

「でもこれにも弱点はあるんすよ？

1つは消えるまでに時間がかかる事ッスね。

その間は無防備ッスから。

そこを狙われるとどうしようもないッス。

もう1つは【ゲート】の先で何らかの現象が起こる事ッスね。

影の【ゲート】なら影ができるし、水の【ゲート】なら水が現れるッス。

まあ基本は背後に回り込むんで関係無いッスけどね…。」

「確かに対人なら最強やな…。」

背後に回られたらなんもできへんし…。」

あれっ？

でも機械なんかもそうなんやないか？」

「【ゲート】自体はそうなんツスけど、問題は俺なんツスよ。

俺じゃ機械は壊せないんで…。」

「そういうことかあ…。」

しかしこんな事ウチらに言っただけで良かったんか？

こんなレアスキル普通は極秘事項やろ？」

「まあ俺をこの隊に行くようにした人からは許可貰ってるんで…。」

大丈夫ツスよ。」

数ある中の1つに過ぎないツスしね。



「それも気になってんのや。

誰があんたをここに派遣したんや？

レジアス中将か？」

ああ、俺がスパイじゃないかと疑ってるんすね。

最初に俺を警戒してたのはそっちっすか。

「違うッスよ。

詳しい事は言えないッスけど、この隊を悪くしようなんて考えて無いッス。」

「信用してええんか？」

「もちろん。

この命をかけてもいいッス。」

「分かった。」

聞きたい事も聞いたし、伝えることも伝えた。

よっしゃ、今日はもうええで。

明日からよろしゅうな。」

「はい。」

よろしく願いしますッス。」

隊長達と打ち解けられた見たいでよかったッス。

これなら明日からも…。

「あつ、そうや。」

戦闘訓練にはちゃんと参加してもらっからな。

ちゃんと覚悟しときいよ。」

一難去つてまた一難ツス…。

## episode 2 挨拶（後書き）

というわけでやっと原作キャラとの絡みが…。

長かった…。

なるべく原作のキャラは壊しなくなかったのですが、見事にはやてが壊れてしまいました。

以後修正していこうと思いますが、自分の文才で出来るかどうか…。

まあ頑張ります。

次回も見てください。

最後にもよろしければ、感想などもいただけると幸いです。

よろしくお願いします。

## episode 3 出向（前書き）

いつの間にかPV200000アクセス突破

ユニークも2800突破

ありがとうございます。

そしてえんヴいい様

閻魔輪廻様

コメントありがとうございます。

ホントに励みになります。

これからも見守っていただければ幸いです。

それではepisode 3 出向が始まります。

## episodes 3 出向

side 真

とうとう出向の日が来てしまったッス…。

今は機動六課の制服に着替えて部隊長室の前にいるッス。

どうしよう…。

すごく入りたくないッス…。

でもいつまでもこうしているわけにもいかず…。

「はあ」。

しょうがない…。

覚悟を決めるッスよ真!!」

意を決して…。

「何をしているの？」

「うぎゃあああああああああ！！！」

「えっ、ちよつと何？」

「なんだ…。」

ハラオウン隊長ツスか…。

脅かさないでくださいツス…。」

「普通に声かけただけなんだけど…。」

それより早く入れば？

八神部隊長も待ってると思うよ？。」

「ちよつと待って下さいツス！！

心の準備が…。」

「ほらほら入るよ。」

ブー

「どうぞ。」

うぎゃああああああ

この人は鬼ツスか!?

「失礼します。」

俺放置だし…。

「何しとるん?

はよ入りいや。」



「うおっ。」

八神部隊長いつの間に…。」

「あんたが固まっとる間や。」

ほらはよ入り。」

「失礼しますッス…。」

この女性陣は何だかみんな強いッス…。」

「なんか言ったか？」

「何も言っていないであります、サ！。」

さらに読心術のスキルもお持ちのようで…。」

「乙女のたしなみや。」

さいですか…。

まあとりあえずやる事を済ますッス。

「本日只今より、一ノ瀬真一等陸士。

機動六課へ出向となりますッス。

よろしく願いますッス。」

「はい。

よろしゅうお願いします。

sondeこの後の事なんやけど…。」

「それは私が説明するよ、はやて。」

「そうか？

ならフェイトちゃんにおまかせするわ。」

「うん。」

これからなんだけど、まずはフォワードメンバーとの顔合わせ。

今後一緒に戦っていく仲間だから、どんな人がいるかは把握してもらわないといけないから。

その後にすぐに経験とスキル、コールサインを確認して訓練って形になるかな。

何か質問ある？」

「1つだけ。」

俺の訓練は自分個人で行ってもいいッスか？」

とりあえずサボりたいので…。

と心の中で付け足したのは秘密っす。

「却下や。」

これから対ガジェット…、もしかしたら魔導師戦があるかもしれへ

ん…。

そんな時に連携取れませんじゃ話にならん。

どうしてもしたいなら自主練でいい。

まあ明確な理由があるなら考えんこともないけど…。

どうせあんたの事や大方サボりたいとかそんな理由やろ。」

なっ…何故バレたっすか…。

「バレいなか。」

顔に出とったわ。」

「八神部隊長。」

表情と心を読まないで欲しいッス!!

プライバシーの侵害ッス!!」

「ああ、あとウチの事ははやてでええよ。」

そっちの方が年上やし…。

その代わりウチも一ノ瀬さんって呼ばせてもらっな。」

スルースか…。

泣きたくなるツス…。

「あつ、じゃあ私もフェイトでいいから。

私も一ノ瀬さんって呼ばせてもらっね。」

フェイトさん！？

あんたもツスカ！？

というか俺順応早いツスね…。

これが原作知識のカツスカ…。

「もう勝手にしてくれツス…。

戦闘訓練もとりあえず出ますが、俺じゃ話にならないと思いますよ？」

「自分のレアスキル使えば何とかなるやろ…」

ほなこれで終わりやから、フォワードメンバーに挨拶に行きい。

フェイトちゃん後お願いな。」

「うん。」

はやてもお仕事頑張つて。

それじゃあ一ノ瀬さん。

行こうか。」

「了解つす。」

とりあえず逃げ出す方法を考えないと…。

「一ノ瀬さん。」

はやてから通信繋がってるよ?。」

『そうそう言い忘れたわ。』

一ノ瀬さん…。

逃げ出そうなんて考えん方が身のためやで…。

そこんとこ覚えといてな…。」

「サー了解したッスサー」

逃げ道塞がれたッス…。

### episode 3 出向（後書き）

とりあえず出向まで書きました。

次はいよいよ前線メンバーと副隊長達が登場です。

どうなる事やら…。

感想をお待ちしています。



**e p i s o d e 4 戦闘訓練（前篇）（前書き）**

とうとうフォードメンバーと真の初対面

どうなることやら…。

それでは e p i s o d e 4 戦闘訓練（前篇） 始まります。

## episode 4 戦闘訓練（前篇）

side 真

今俺はフェイト隊長に連れられて訓練場に向かってるんッスけど…。

「あの〜フェイト隊長？」

ちゃんと歩きますから、引きずらないで欲しいッス。」

「却下です。」

さっきから一ノ瀬さん、ずっと逃げようとしてるじゃないですか！  
！」

げっバレてるッス…。

「はやてにあんなに言われてたじゃないですか…。

なんでそんなに訓練嫌なんですか？」

なんでと言われても…。

ねえ…。

「嫌なものは嫌なんツスよ。

俺魔法使えないから、なかなかつらいんツスよ…。

空飛ばれたら、もうどうしようもないツスし…。」

「だからこそそのチーム戦じゃないですか…。

そういえば一ノ瀬さんの戦闘スタイルって、どんなのですか？

デバイスが使えないから、やっぱりクロスレンジ？」

「まあそこは説明が二度手間になるんで、後で説明するツスよ。」

実際は何でも使えるっすけど…。

でもこんなところで宝具なんか使えないし…。

ここはやっぱり変態神父と子ども先生が使う拳法にしよう…。

「一ノ瀬さんそろそろ訓練場に着きますよ。」

ぽーっとしてないで行きますよ。」

「はいはいっす。」

予定ではフォワード隊と合流するはずだったんすけど…。

「あの〜…。」

なんで俺は副隊長のお二方に睨まれてるんすかね…。

「お前が一ノ瀬か…」

私はシグナム。

ライトニングの副隊長だ。

噂は聞いている。

お前がどうなるうが私は知らんが、他のメンバーを巻き込むなよ。」

うわー。

なんか嫌われてるッス…。

なんかした覚えはないんスけど…。

まあ大方、「お荷物」の肩書が悪い方に取られてるんだと思うッスけど…。

「あたしはヴィータ。

スターズの副隊長だ。

お前が何を考えてんのか知らねえけど、なんかあつたらあたしがぶっ潰すかな。」

あゝ隊長達と一緒にッスか…。

こういうときにレジアス中将の隊から来たって事がネックになるん  
スね…。

「ヴィータ副隊長にシグナム副隊長？

なにか勘違いしてるみたいッスけど、俺はスパイじゃないッスよ？  
隊長達にもこのことは伝えてるッスよ？」

「口ではなんとも言えるからな…。」

「まあ俺って怪しい風体してるッスからね。

まあ信じられないのしょうがないッスね。」

「自分で言うか…。

まあでもそういうことだ。

スパイじゃない証拠を見せて欲しい。

でなければ信じられん。

この異動はおかしすぎるからな…。」

「証拠ツスカ…。」

うん。

まだ見せられないツスね。

まあ俺も皆さんを信用してないんで…。

皆さんが信用に足ると思ったら見せますよ。」

ホントは信用してるんスけどね…。

まあまだ言つべきではないでしょ…。

誰が聞いてるか分かんないツスし…。

「ほう…。」

意外に頭が切れるらしい…。

見方を改めよう。

とりあえずは信頼しておく。」

おいおい…。

「自分で言っというてなんなんっすけど、いいんスか？」

「ああ。」

いずれは見せてくれるんだろ。

ならいいさ。」

敵わないッスね〜。

「シグナムがそう言うなら、あたしも何にも言わねえよ。」

「ありがとうございますッス。」

「じゃあ今度は他のメンバーに紹介する。」



ついてこい。」

「はいッス。」

うお〜。

見られてるッス…。

ガン見されてるッス…。

「みんなに紹介するね。」

今日から機動六課に出向してきた一ノ瀬さん。

じゃあ一ノ瀬さん自己紹介を。」

「はいッス。」

今日から機動六課に出向となった一ノ瀬真一等陸士ッス。

みんなからしたらおっさんかもしれないッスけど、仲良くして欲しいッス。」

「おっさんって…。」

一ノ瀬さんはまだ26歳じゃないですか。

え〜つと一ノ瀬さんはライトニング隊に所属になるからね。

エリオ、キャラ挨拶して。」

「はい。」

エリオ・モンディアル三等陸士です。

え〜と…。」

ん？

呼び方かな？

「名前で呼んでいいッスよ。」

「それじゃあ真さん。」

よろしくお願いします。」

エリオってなかなかカッコイイすよね。

いいな…。

俺もカッコよく生まれたかったッス…。

「え〜っと。」

キャラ・ル・ルシエ三等陸士であります。

真さん、よろしくお願いします。」

「うんよろしくッス。」

キャラはおつとり系で癒されるッスね。

はっ！！

ロ、ロリコンじゃないツスよ!!

断じて違うツスからね!!

「それじゃあスターズも自己紹介しようか。」

「はい。」

スバル・ナカジマ二等陸士です。

よろしくお願いします。」

スバルは…。

元気っ娘っすね。

「ティアナ・ランスター二等陸士です。

よろしくお願いします。」

ランスター？

そうか…。

そついやティアナってティードの妹だったツスね…。

「よろしくツス。」

「それじゃあーノ瀬一等陸士。」

これから午後の訓練始めるんだけど…。

準備はよろしいですか？」

うえゝ。

やっぱリツスカ…。

「お腹が痛いので、見学…。」

「却下。」

「ですよねぇ。」

諦めが肝心ッスかね…。

「わかったッス。

やるッスよ…。

たぶんすぐ撃墜されるッスよ？

あと高町隊長。

俺の事は普通に呼んでいいッスよ。」

「うん。

じゃあーノ瀬さんって呼ばせてもらっよ。

私の事もなのはでいいからね。

そつえばーノ瀬さんはどんな戦闘方法なの？」

「まあストライクアーツみたいな感じッスかね。

「というかそれしかできないんすけどね…。」

「それってどういうことですか？」

「ここでそれを聞くッスか、スバルよ。」

「説明めんどくさいのに…。」

「この話も何回目ッスかね…。」

「俺はリンカーコアが無いんすよ。」

「一応レアスキルがあるから魔導師登録になってるんすけどね。」

「という訳で俺は魔法もデバイスも使えない落ちこぼれなんッスよ。」

「やっぱり無言…??？」

「「「「「ええ~~~~~!!!!!!」」」」」

うおっ!!

六重奏!!

「なにっ!?

どういうことだそれ!?

「どういうことも何もそのまんまツスよ、ヴィータ副隊長。

俺はレアスキルだけの魔導師って事ツス。

そのレアスキルも隊長達にはお見せしましたし、まあ多分今からの訓練にも使うツスよ。」

「そういうことだよ、ヴィータちゃん。」



もし一ノ瀬さんの事が気になるなら、最初に軽く模擬戦してみる？」

「そうだな。」

という訳だ。

一ノ瀬、相手をしろ。」

「嫌…。」

「拒否権は無いからな。」

「うへへ。」

泣きたいツス…。

「まあ、あたしに一撃入れたら終わりにしてやっから。」

「その前に撃墜されそうツス…。」

「じゃあ他のみんなは見学しとこうか。」

じゃあ一ノ瀬さん頑張ってくださいね。」

「了解す…。」

とりあえず1分は持たそう…。

「一ノ瀬、覚悟しろよ。」

これは死んだくさいッスね、俺…。

**e p i s o d e 4 戦闘訓練（前篇）（後書き）**

意外な長さ…。

疲れたツス…。

でも無事前線メンバー全部出せたし…。

良かった良かった。

今回はヴィータと真の模擬戦です。

戦闘シーン上手く書けるかな？

不安しかないですが、頑張ります。

## episode 5 戦闘訓練（後篇）（前書き）

PV40000アクセス突破

ユニーク5000突破

ありがとうございます!!

とても稚拙な文で自分の才能の無さを痛感していますが、それでも多くの人がこの小説を見ていただいてる事に大変幸せに思っております。

非才の身ではありますが全力で頑張りますので、見守っていただければ幸いです。

そしてジント様

コメントありがとうございます。

とても励みになります。

これからも見守っていただけると幸いです。

それではepisode 5 戦闘訓練（後篇） 始まります。

episode 5 戦闘訓練（後篇）

side 真

なんで俺はこんなところにいるんスかね…。

「おらっ、さっさと構えろ!!」

うわぁ…。

ヴィータ副隊長、殺る気満々ツスよ…。

バリアジャケットも装備してるし…。

無理っすう…。

「いくぞ!!」

「お手柔らかにツス。」

とりあえずは絶対回避ッスね。

あれを食らったら一撃で終わりッス。

「おらあああああ  
」

ドゴーン

「ちっ…避けたか。

どこに行きやがった。」

「ここッス…よっ!!」

影の【ゲート】でヴィータ副隊長の影に移動し、声をかけながらそのまま垂直に蹴り上げる。



うわっ 予想以上に飛んじやったッス…。

まあ大丈夫っすよね。

プロテクション張ってたみたいッスし…。

こんだけやれば文句は出ないっすよね。

そろそろやられるとするッスか…。

魔法弾に当たって撃墜されればいいッスよね…。

「やるじゃねえか、一ノ瀬…。

正直舐めてた…。

こっからはマジで行く…。

いくぞアイゼン…！

フォームツヴァイ…！」

えっ……。



ちよつ、ヴィータ副隊長！！

なにを言ってるんスカ！？

「ラケーテン…ハンマーアアアア！！」

「ぎゃああああああああああ！！」

「ふむ。

一ノ瀬は使えるな。

魔法は使えないが、あのスキルとストライクアーツはなかなかのものだ。」

今は模擬戦後の反省会をしているッス。

模擬戦はどうなったかって？

そんなのヴィータ副隊長にぶっ叩かれて撃墜しましたけど？

死ぬかと思ったッス…。

「ああ、あたしもびつくりした。

なんでお前落ちこぼれなんて言われてたんだ？

普通の魔導師なら、簡単にやれるだろ？」

「戦うの疲れるんで戦闘訓練はサボってたッス。

まあ、かと言ってデスクワークもしないんスけどね。」

「はあ…。

お前なあ…。」

「あはは…。

まあ一ノ瀬さんの実力も分かったし、早速チームでの訓練に入ろつか。」

えっ…。

マジッスか？

俺今模擬戦終わったばっかなんスけど…。

「あの〜休憩とかは…？」

「さて行くよ〜。」

「スルー！？」

泣きたいッス…。

「あっあの…！」

「うん？」

スバルが声をかけてきたんスけど…。

なんでそんなに緊張してんスカ？

「あつ、あたしにストライクアーツを教えて下さい！！」

「なんで俺なんスカ？」

「さっきのヴィータ副隊長との模擬戦を見て、すごいって思ったんです。

私なんかとは技術からして違ってる…。

一ノ瀬さんにストライクアーツを教わればもっと強くなれるって…。

だからお願いします！！」

「そんなたいしたもんじゃないっすけど、断るッス。

めんどくさいッスし…。」

「そっそっですか…。」

「と言うのは冗談で…。」

スバルにはまだ先にやる事があるッスよ。

それが出来たらもう一度来るッスよ。

その時にはスバルが強くなるお手伝いをするッスよ。」

「はっはい!!」

頑張ります。」

ああゝあんなにはしゃいじゃって…。

若いつていいっすねえ…。

「おい、一ノ瀬。

早く来いよ。」

「はいはい。

今行くッスよ…。」

さてと…。

年寄りの俺も頑張りますッスかね…。

**episode 戦闘訓練（後篇）（後書き）**

初戦闘シーン！！

テラ難しいッス…。

そして作者の戦闘シーンのへたくそ加減が半端無いッス。

精進します…。

## episode 6 ファースト・アライト（前書き）

タイトルが思いつかなかったッス…。

すいません…。

さらには更新も遅れてしまつて…。

重ね重ねすいません…。

そしてドナドナ様

烈火の祝福様

無添加〇様

コメントありがとうございます。

いただいたコメントを励みにして頑張ります。

それではepisode 6 ファースト・アライト始まります。



## episode 6 ファースト・アライト

side 真

「はい。せいれ〜っ。」

「はい…。」

おっ、やっと終わったッスね。

「「「「はあはあ…。」」」」

うわっ、皆ボロボロッスねえ…。

なのは隊長容赦ないッスからねえ…。

俺？

俺は結局、副隊長並みには戦えるところを見せたので自主練になったッス。

なのは隊長からのお願いで、もうちょっとしたらストライクアーツの教導もしないといけないッス。

俺、教導官の資格持ってないッスけど…。

いいんスカね…？

「じゃあ今日の早朝訓練ラスト1本。

皆、まだ頑張れる？」

「『はい！』『』『』」

えっ、まだやるんスカ？

なのは隊長…。

鬼ッスね…。

というかあの子らも良くやるッス…。

これが若さッスカね…。

「アクセル…シュート!!」

「どわっ!!」

なのは隊長、なにするんっすか!?!」

今鼻先掠ったッスよ!!」

「今失礼なこと考えたでしょ…。」

「ウゲツ、何故バレタッス!!」

「カタコト!?!」

というか今肯定したよね…。」

一ノ瀬さん…。」

午後の訓練、私と模擬戦ね。

拒否権は無いから。」

「うう、すいませんッス…。」

それだけは勘弁して欲しいッス…。」

「ダメ。」

どうやら今日は俺の命日らしいッス…。」

「さて気を取り直して、シュートイベーションをやるよ。  
レイジングハート。」

「all right

axel shooter」

うわぁ、ここでシュートイベーションっすか…。」

ご愁傷様っす…。」

「私の攻撃を5分間、被弾無しで回避しきるか、私にクリーンヒットを入れればクリア。」

誰か1人でも被弾したら、最初からやり直しだよ。

頑張っていこう。」

「「「はい!!」「」「」

条件もなかなかきついッスね。

新人たちはどう乗り切るッスかね…?

「このボロボロ状態でなのはさんの攻撃を5分間、捌き切る自身ある?。」

「無い!!」

「同じくです。」

「じゃ、何とか一発当てよう。」

「はい。」

「よし。」

行くよ、エリオー!!」

「はい!!」

スバルさん!!」

ふむ。

回避は無理、クリーンヒットを狙う…か。

自分たちの状況と実力が分かってるみたいッスね。

しかしなのは隊長に一発当てるのは簡単な事じゃないッス。

どう動くのか…。

見物ッスね。

「準備はOKだね。

それじゃあ…。

レディー…ゴー!!」

「全員絶対回避!!」

2分以内で決めるわよ!!」

「「「おう」「」

ドォーン

結局最後はエリオがなのは隊長にクリーンヒットさせ、シュートイ  
ベーションは終わった。

しかしなかなか面白いものが見れたッス。

今後の参考とさせてもらっッスよ。

「さてここで一ノ瀬さんにも、感想を聞こうかな。」

うえっ!?

「俺ツスか？」

参考にもならないと思うんツスけど…。」

「いいからいいから。」

何でもないことでも、参考になったりするし。」

「そうツスか？」

じゃあまずはスバル。

まだまだ攻撃が粗いっすね。

大振りが目立つツス。

そこはおいおい直していくツスよ。



あとは回避アクションとリカバリーッスね。

この辺も個別の時にでもするッス。

まあスバルのクロスレンジの爆発力は凄まじいものを持つてるッス。  
だから確実にそれを当てれるようにするのが今後の課題ッスね。」

「はい！！」

分かりました。

ありがとうございます！！」

「次はティアナッスね。

でも俺は近接専門みたいな所があるから、そこはなのは隊長に聞いた方がいッスね。

とりあえず俺から言えるのは武器を変えなさいって事ッスね。

さすがに実戦で弾詰まりとかは洒落にならないッスから…。

後はさすがに長年一緒だっただけあってスバルとは息ぴったりだったので、さすがと思ったッス。」

「どうもありがとうございます…。」

なんだかスバルと名コンビと言ったら微妙な顔したツス…。

今までに何かあったんスカね…。

「エリオとキャラは多すぎて突っ込めないツス。

体のこともありますし、技術面もツスね。」

「そうですね…。」

「ありがとうございます…。」

あらら。

落ち込んだじゃった。

そんなつもりで言った訳じゃないんっすけどね…。

フォローしとかないと…

「落ち込む必要はないツスよ。」

エリオとキャロはまだ成長期ツスから。

出来てなくて当たり前のこと多いツス。

ゆっくり出来るようになれば良いんスよ。

今エリオ達が出るのは自分のデバイスをちゃんと扱えるようになることツスよ。

今は振り回されているのが見て取れたツスから。

それに慣れるっすよ。

それが出来るようになったら、またアドバイスするツスよ。」

「はいっ!!」

「分かりました。」

「こんな所で良いツスカ?」

自分が言えることは言っ たと思うッスけど…。

「ありがとうございます。」

割とちゃんと見てくれているのが分かりました。」

「むっ。」

その言い方はひどくないッスか？」

「にやはは。」

さて皆。

チーム戦にもだいぶ慣れてきたね。

ティアナの指揮もだいぶ筋が通って来たよ。

指揮官訓練受けてみる？」

「いえっ…あの…戦闘訓練だけでいっぱいいいです。」

「あははは。」

「きゅ〜？

きゅくる〜。」

「フリード？

どうしたの？」

「なんか焦げ臭いような…。」

確かに…。

変なおいがするッス…。

「あつ！！

スバル、あんたのローラー！！！」

「ふえ？」

バチッバチバチッ

あゝあ。

あんな無茶するからツスね…。

「うわっやばっ!!」

あっちゃゝ。」

プシュゝ

「しまったゝ。」

無茶させちゃったゝ。」

「オーバーヒートかなあ？

後でメンテスタッフに見てもらおう。」

「はい…。」

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「はい…。」

「だましだましです…。」

「皆訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ…。」

「新…。」

「デバイス？」

「じゃ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるつか。」

「「「「はい。」」」」

「ん？」

あの車って…。」

うおっ、かっこいい車…。

いいッスね。

あんな車乗りたいッス…。

あれ、あの車に乗ってるのって…。

「フェイトさん…！」

八神部隊長…！」

「うん。」

「うん。」

「すごい…！」

これ、フェイト隊長の車だったんですか…？」



「そつだよ。」

地上での移動手段なんだ。」

「いい車ツスね。」

俺も車好きツスから、うらやましいツス。」

「そつなんだ。」

今度運転してみる？」

「いいんスカ!？」

ありがとうございますツス。」

「それよりみんな、練習の方はどないや？」

「一ノ瀬さんもしっかりやっとなるんやろな？」

「あ…えへへ…。」

「頑張ってます…。」

「俺もちゃんとやってるッスよ。」

「ほんまか？」

サボっとつたら…。

わかつとるな…。」

「も、もちろんッス…。」

怖いッス…。

怖いッスよ…。

「それよりエリオ、キャラゴめんね。」

私は2人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて…。」

「あつ…。」

いえ、そんな…。」

「大丈夫です。」

「4人ともいい感じで慣れてきてるよ。」

「一ノ瀬さんも私じゃ教えないクロスレンジのアドバイスとかしてくれるし…。」

「いつ出勤があっても大丈夫。」

「そうか。」

「それは頼もしいな。」

「ププッ、皆照れてるッス。」

「こういうの何か新鮮ッスねえ…。」

「2人はどこかにお出かけ？」

「うん。」

「ちよつと6番ポートまで。」

「教会本部でカリムと会談や。」

夕方には戻るよ。」

「私は昼前には戻るから…。」

お昼は皆で一緒に食べようか。」

「「「はい。」「「「

「ほんならな〜。」

ふう、さっぱりしたッス。

訓練の後のシャワーは格別ッスね〜。

「真さん…。」

あの…。

お兄さんって呼んでもいいですか…？」

「ブブツ〜！！」

ごほっ、げほっ…。

いきなりどうしたんスか…？」

「あっ、すいません…。

迷惑でしたよね…。

忘れてください…。」

「いや迷惑じゃないッスけど…。

とりあえず理由を聞きたいッス。」

「さっきの朝の訓練でアドバイスしてくれた時に、なんかお兄さん  
みたいだな〜って…。

僕兄弟いなかったから…。

そついうのちよつと懂れてて…。」

なるほど…。

幼い頃から甘えられなかった反動ツスか…。

男の子は異性にはちよつと遠慮しちゃう節もあるし…。

エリオは特に大人の中で育ってきたから、精神的にませてるし…。

まあ、まだ10歳ツスしね…。

「なるほど…。

まあ、こんなのでければ兄になってもいいツスよ。」

「ほんとですか!?

ありがとうございます!」

「ほらほら。

兄弟なんスから、堅苦しいのも無しツスよ。

「節度は守らないといけないッスけど、今はそんな時でもないッスよ。」

「うん。」

「お兄さん。」

「なにこの純粋な生き物…。」

「フェイト隊長が溺愛するのが分かる気がするッス…。」

「いや言つとくけど、俺にそんな趣味は無いッスよ!!」

「いやマジで!!」

「お兄さん、どうしたの?」

「い、いや!」?

「何でもないッスよ!」?

「??」?

そうなの？？」

「当然ッス。」

「お兄さんがそういうならそうなんだね。」

「そっいえば、皆遅いね…。」

「まあ女の人にはいろいろあるんすよ。」

「黙って待つのも男の仕事ッスよ。」

「はい。」

「お兄さん。」

「ふう…。」

「なんとかごまかせたッス…。」



「うわ〜。

これが…。」

「あたしたちの新デバイス…ですか？」

「そうですね。」

設計主任あたし。

協力なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長。」

元氣よく説明するのはシャーリー。

本名は忘れたツスけど、フェイト隊長の副官ツスね。

「はあ…。」

これが皆の新デバイスツスカ…。

ちよつとうらやましいッス…。

「ストラーダとケリユケイオンは変化無しかな…。」

「うん。」

そうなのかな…。」

「違います。」

「あつ…。」

「変化無しは外見だけですよ？」

「リンさん。」

「はいです。」

2人はちゃんとしたデバイスの使用経験が無かったですから、感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです。」

「あれで最低限…。」

「ホントに…?」

あれで最低限ッスか…。

この世界のデバイスもいい加減チートだと思うッス…。

子どもでも真空波起こせるし、機械切れるし…。

「皆が扱う事になる4機は六課の前線メンバーとメカニックススタッフが技術と経験の粋を集めて完成させた最新型!!」

部隊の目的に合わせて。

そしてエリオやキャロ、スバルにティア。

個性に合わせて造られた文句なしに最高の機体です。

この子たちはまだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが込められて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです。

ただの道具や武器と思わないで大切に…。

「ただ性能の限界まで思い切り全開で使ってあげて欲しいです!!」

「うん。」

「この子たちもね、きっとそれを望んでるから。」

「まあ、あんまり頼りすぎるのもだめッスけどね。」

「あゝ真さんひがみですか？」

「だってなんツスか？」

「そついう生意気な口は俺から一本取ってから言つもんツスよ、スバル!!」

「おつ、こいつのほつぺた柔らかいッスね。」

「いひゃいひゃい。」

「ごめんごめん。」

おまたせ〜って一ノ瀬さん何やってるの？」

「なのはさ〜ん。」

「ナイスタイミングです。」

ちょうどこれから機能説明を…。」

「なのはふあ〜ん。ふあふふえふえくあは〜い。」

「スバル…。」

何言ってるのか分かんないよ…。」

とりあえず話が進まないから、一ノ瀬さん離してあげてくれませんか？」

しょうがない…。」

なかなか面白かったんすけどね…。」

「ほれッス。」

「うつつ」。

痛い…。」

「スバル、どうしたの？」

「スバルが真さんを茶化したから、お仕置きされたんですよ。」

「にやはは…。」

それはスバルが悪いかな…。」

当然ッスー！

「そろそろ機能説明してもいいかな？」

「ああごめんねシャーリー。」

もうすぐにも使える状態なんだよね？」

「はい!!」

なんであんたが答えるんスカ…。

リン曹長？

「まず、その子たちみんな何段階かに分けて出力リミッタ かけてるのね。

一番最初の段階だと、そんなにびっくりするほどパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで扱いを覚えていつて。」

「で、各自が今の出力を扱い切れるようになったら、私やフェイト隊長。

リンやシャーリー。

それにそこにいる一ノ瀬さんの判断で解除していくから。」

「うえっ!？」

俺もっすか？

聞いてないツスよ!？」

そういうことは早めに言って欲しいッス…。

「クロスレンジの教官になったんだから、やってもらいますよ。

簡単ですよ。

この子たちが次のステップに進んでいいと思つたら、その時です  
から。」

「まあ頑張るッスよ…。」

「ということですよ。」

簡単にいえばみんなはこの子たちと一緒にレベルアップしていくよ  
うな感じですね。」

「あつ、出力リミッターって言うと、なのはさん達にもかかってま  
すよね?。」

「ああ、私たちはデバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね。」

「「「「えっ。「「「「」



「リミッターがですか？」

「能力限定って言うてね。」

うちの隊長と副隊長は皆だよ。」

私とフェイト隊長。

シグナム副隊長とヴィータ副隊長。」

「はやてちゃんもですね。」

「うん。」

そろそろッスよね。」

こんだけエースが集まる部隊なんッスから。

「え〜と…。」

「ほら。」

部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない。」

「あ、あはっ…。」

「そうですね…。」

「1つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有したい場合は、そこにうまく収まるよう魔力の出力リミッターをかけるですよ。」

「まあ裏技っちゃあ裏技なんだけどね。」

「ウチの場合だと、はやて部隊長が4ランクダウンで、隊長達はだいたい2ランクダウンかなあ。」

「4っ…。」

八神部隊長ってSSランクのはずだから…。」

「Aランクまで落としてるんですか？」

「はやてちゃんもいろいろ苦労してるです。」

「なのはさんは…?」

「私はもともとS+だったから2・5ランクダウンでAA。」

だからもうすぐ1人で皆の相手をするのはつらくなってくるかなあ。

その時は一ノ瀬さん一緒にやりましょうね?」

「うえっ。」

また俺ッスか?

無理ッスよさすがに…。

4人相手はきついッス。」

「だから4対2でやるんじゃないですか。」

「それでも無理ッス!!」

ホントに鬼しかいないんスカここは…。

「という具合に隊長さんたちは、はやてちゃんの。」

はやてちゃんは、直接の上司のカリムさんか部隊の監査役、クロノ提督の許可が無いとリミッター解除ができないですし…。

許可は滅多なことでは出せないそうです。」

「そうだったんですね…。」

「まあ隊長達の話は心の片隅くらいでいいよ。」

今は皆のデバイスの事。」

「はい。」

「はい。」

「新型も皆の訓練データを基準にして調整してるから、いきなり使っても違和感はないと思うんだけどね…。」

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか。」

「遠隔調整もできますから、手間はほとんどかからないと思いますよ。」

「ふう、便利だね最近は…。」

なのは隊長…。

それはちょっとおばさん…。

「今失礼なこと思わなかったかな？」

「一ノ瀬一等陸士？」

「いえ!!」

そんなことは決して!!」

「ほんとかなあ？」

今すっごい失礼な事言われたような気がしたんだけどなあ…。」

怖いッスよなのは隊長。

「まあいいや。」

今回は見逃してあげるよ…。

次言ったらO H A N A S H Iしよつね…。」

「サーイエッサー!!」

マジで死ぬかと思ったッス…。

「そ、そつだ。」

スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ機能も上手く設定出来てるからね。」

「ホントですか!?!」

「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能も付けといた。」

「うわ〜。」

「ありがとうございます。」

ブーブーブー

「このアラートって。」

「1級警戒態勢!?!」

「グリフィス君!?!」

「はい。」

「教会本部から出動要請です。」

「なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。」

「こちらはやて。」

「うん。」

『状況は?』

『教会騎士団の調査部で追ってたレリックらしきものが見つかった。

場所はエイリム山岳丘陵地区。

対象は山岳リニアールで移動中。』

『移動中って...。』

「まさか...。」

「こりゃ、ガジェットに襲われてるって落ちッスね...。」

「俺の出番はなさそうッス...。」



『そのまさかや…』

内部に侵入したガジェットのせいで、車輛の制御が奪われてる…。

リニアレール内のガジェットは最低でも30体。

大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれへん。

いきなりハードな初出動や。

なのはちゃん、フェイトちゃん行けるか?』

『私はいつでも…。』

「私も。」

『スバルにティアナ、エリオ、キャロ!!』

ついでに一ノ瀬さん。

みんなもOKか?』

「「「「はい。」」」」

「ついでって…。」

確かに役立たずだけどさあ…。」

泣いちゃうツスよ俺…。

『よし!!』

若干1名を除いていいお返事や。

シフトはAの3。

グリフィス君は隊舎での指揮。

リインは現場管制。』

『はい。』

「はい。」

『なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮。』

「うん。」

『ほんなら…』

機動六課フォワード部隊出動!!」

「「「「「はい。「「「「「」

『了解。』

皆は先行して。

私もすぐに追いかける。』

「うん。」

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね。」

「はい。」

「頑張ります。」

「エリオとキャロ、それにフリードもしっかりですよー!。」

「はい。」

「はい。」

「きゅ〜。」

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから。」

「おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう。」

「「「「はい。」」」」

「うん。」

「ってあれ？」

真さんはどうするんですか？」

「俺はヘリで待機ッス。

皆が危なくなったら、俺のスキルで助けに行くッス。

それにガジェット相手だと俺、歯が立たないッスから…。」

「それだけでも安心して戦えます。」

「よろしくお願いします。」

俺泣いてもいいッスかね…。

始めて人に頼られた気がするッス…。

つてありや…。

キャラの様子が…。

なんか不安そうッスね…。

まあ初出勤だし、この子の過去を考えたら不安にもなるッスよね…。

はてさて無事に行くといいいんスけどね…。

## episode 6 ファースト・アライト（後書き）

遅くなってしまってすいません。

何回か書きなおそうとして長くなってしまいました…。

めっちゃ肩こるツス…。

そして初。

アニメを見ながら書きました。

なので無理やり押し込んでる感がダダ漏れです！！

やっぱり作者はオリジナルストーリーを書く方が気楽ですらすら行ける気がします。

今回は指摘がありましたので、ちょっとチャレンジと言いますが、地の文を「ゝっす」口調ではなくしていいこうと思います。

そうしたら第3者の目線で話が進みそうな…。

まあ何事も挑戦！！

やってみることが大事ツスよ！！

つきましてはアンケートを取りたいと思います。

今までの「ゝッス」口調の完璧主人公目線の地の文。

はたまたおそらく第3者目線になるであろう地の文。

どっちが読みやすいか…。

感想とともにコメントいただけたら幸いです。

では次回でお会いしましょう。



## episode7 ファースト・アライトsideはやて(前書き)

ずいぶんと更新が遅れてしまい、申し訳ありません。

いろいろ考えているのですが、そこに繋げるまでがうまくまとまらずこんなに遅くなってしまいました。

こんな展開にしようなどはだいぶ決まっているので、これからなるべく早く更新しようと思います。

そして100000pv突破!!

ユニークも10000突破!!

ありがとうございます!!

最初はこんなに見てもらえるとは…な感じでした。

次回にでも100000pv&10000ユニークに感謝して外伝を書こうか等愚考しております。

これからは是非魔法少女リリカルなのは〜お荷物と呼ばれた男〜をよろしく願います。

それではファースト・アライトsideはやてが始まります。

episode7 ファースト・アライトsideはやて

sideはやて

ウチはフェイトちゃんの車に乗せてもらって6番ポートに向かっている。

理由は…。

「聖王教会騎士団の魔導騎士で管理局本局の理事官…。

カリム・グラシアさんかあ。

私はお会いしたこと無いんだけど…。」

フェイトちゃんの言っていたカリムに会うため。

「ああ、そうやったねえ。」

「うん。」

はやてはいつから？」

「うん。」

私が教会騎士団の仕事に派遣で呼ばれた時で、リインが生まれたばつかの頃のはずやから…。

8年ぐらい前かなあ。」

「そつか…。」

「カリムと私は信じてるものも立場もやるべき事も全然ちゃうんやけど…。」

今回は2人の目的が一致したから…。

そもそも六課の立ち上げ、実質的な部分をやってくれたのはほとんどカリムなんよ。」

六課の立ち上げのために奔走した時のことを思い出す。

うう、ほんまにお世話になったなあ…。

「そうなんだ。」

「おかげで私は人材集めの方に集中できた。」

「1人余計なんも来たけどな…。」

「なにかにつけてはサボろうとするからなアイツ…。」

「あはは…。」

「え〜と信頼できる上司って感じ?」

「う〜ん、仕事や能力はすごいんだけど、あんまり上司って感じはせえへんなあ…。」

「どっちかっていうと、お姉ちゃんって感じや。」

「あはは。」

「そっか。」

「まあレリック事件が一段落したら、ちゃんと紹介するよ。

きっと気が会うよ。

フエイトちゃんもなのはちゃんも。」

「うん。

楽しみにしてる。」

聖王教会の本部に着いた私はすぐにカリムの部屋に通された。

「カリム、久しぶりや。」

久しぶりに会う姉替わりの人に挨拶をする。

「はやて…。」

いらっしやい。」

笑顔で迎えてくれるカリム。

やっぱりお姉ちゃんやなあ。

ウチはテーブルに着き、出してもらった紅茶を一口飲んでから話し始める。

「ごめんなあ。」

すっかりご無沙汰してもうて…。」

「気にしないで。」

部隊の方は順調みたいね。」

「えへっ、カリムのおかげや。」

「うふふ。」

そういうことにしとくと、いろいろお願いもしやすいかな。」

「あはは。」

なんや、今日の会って話そうはお願い方面か？」

カリムにはお世話になったし、やぶさかではないけどな。

「はあ…。」

ため息をついてパネルを操作するカリム。

暗幕まで引いて…。

見せたい映像でもあるのかな？

とりあえず出てきた映像を見てみよ。

ってこれ…。

「これ、ガジェット…。

新型？」

「今までの？型以外に新しいのが2種類…。

戦闘性能はまだ不明だけど…。

これ…。

「？型は割と大型ね…。」

カリムの出してくれた人型と比較する。

確かに大きいな…。

「本局にはまだ正式報告はしてないわ。

監査役のクロノ提督には触りだけお伝えしたんだけど…。」



「これは…!!」

ウチの目に1つの映像が止まる。

「これが今日の本題の1つ…」。

「昨日付けでミッドチルダに運び込まれた不審貨物…」。

「レリック…やね。」

「その可能性が高いわ。」

「?型と?型が発見されたのも昨日からだし…」。

「ガジェット達がレリックを見つけるまでの予想時間は?」。

これに分かるのと分からないのではえらい差が出る。

早めに対処せんと…」。

「調査では早ければ今日明日。」

「せやけどおかしいな…。」

レリックが出てくるのがちょお早いような…。」

「それが本題の2つ目…。」

かの翼をもぎ取る者のね。

その人に関しての新たな情報が分かったの。」

「なんやて!!」

予言に出ていたあの!？」

「ええ。」

それも昨日よ。

関係があると思えない。」

確かにそれは怪しいな…。

「なあカリム。

それはどんな情報なん？」

「はやては三提督直属の部隊は知ってるわよね。」

「当然や。

あの人知らん人は管理局におらんやろ。

三提督直属特別遊撃部隊LAST CARD――《最後の切り札》。

その唯一人の隊員《刹那の処刑人》。

こんだけしか情報はないけどな…。

極秘事項やし…。

まさか…。」

「ええ。

彼がそうみたいね…。

予言に全て該当する…。」

「彼つて…。

男の人なんか？」

「そうよ。

昨日ミゼット提督とお話したのだけれど、その時に教えていただいたわ。」

えっ…。

それって極秘事項ちゃうの？

「確かに驚くわよね。

ミゼット提督が言うには、近いうちに彼は表で活動するそうよ。

それがいつかは分からないらしいのだけれど。」

「ええ〜!!!」

「だから私には早めに情報を開示してくれたらいいわ。

はやてに話すことも了承してくれてる。」

「なるほど…。」

「一昨日にモニター越しでお話させてもらったの。

ガジェットを造るぐらいの科学者なら盗聴できるかも知れない…。

もしかしたらこの事を聞いて動いたのかもしれない…。

ちよつと迂闊だったわ…。

はやてはどう思う？

これをどう判断すべきか、どう動くべきか…。

そのことを聞きたかったの。

レリック事件もその後起こるはずの事件も対処を失敗するわけにはいかないもの…。」

なるほど…。

そのための相談やったんやな。

でも何とかなる。

何とか出来る。

そのための六課や。

まずはカリムを安心させんとな…。

そう思いパネルを操作して暗幕を開ける。

「っ!!」

はやて？」

「まあ、何があってもきつと大丈夫。

カリムが力を貸してくれたおかげで、部隊はもういつでも動かせる。

即戦力の隊長達はもちろん、新人フォワード達も実戦可能。

予想外の緊急事態にもちゃんと対応できる下地が出来てる。

そやから大丈夫!!」

そうきつと大丈夫や!!

1人例外はおるけどな…。

episode7 ファースト・アライツideはやて(後書き)

久々に書きました。

以前指摘があつたので地の文を少し変えてみようと思ってみたら、  
見事に失敗しました。

作者の文才ではこれが限界でした。

すいません。

ごめんなさい。

また折を見て挑戦しようと思いますが、それまでご容赦を…。

それではまた次回お会いしましょう。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0414p/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS～お荷物と呼ばれた男～

2010年12月10日02時23分発行